研究紀要　第9号　129－142頁　2001年3月
㈶とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター

〔研究ノート〕

古墳時代前期の甕形土器について

－栃木県における甕形土器の形態と消長－

片根（かたね）　義幸（よしゆき）
藤田（ふじた）　直也（なおや）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　対象地域と遺跡
Ⅲ　甕形土器の分類
Ⅳ　時期設定
Ⅴ　甕形土器の傾向
Ⅵ　まとめ

栃木県内の古墳時代前期の土器様相は、前代から直接的な系譜が辿れず他地域からの波及や影響がある。日常的な煮沸具である甕形土器には、刻み口縁・素口縁・S字状口縁など東海や南関東系の系統が認められる。これらは一括して波及していくのではなく、各段階に幾つかのルートで波及―定着していると考えられる。

本稿では、県内集落遺跡で顕著に見られる東海・南関東系の甕形土器の類例を集成し、分類基準・時期区分を設けて刻み口縁甕・素口縁甕の形態変化を確認した。この中から分類的・時間的な画期を資料から抽出し一視点を示すとともに、段階ごとの分類傾向も抽出し、甕形土器の波及ルートや定着過程を明らかにするための基礎的な作業とする。

Ⅰ　はじめに

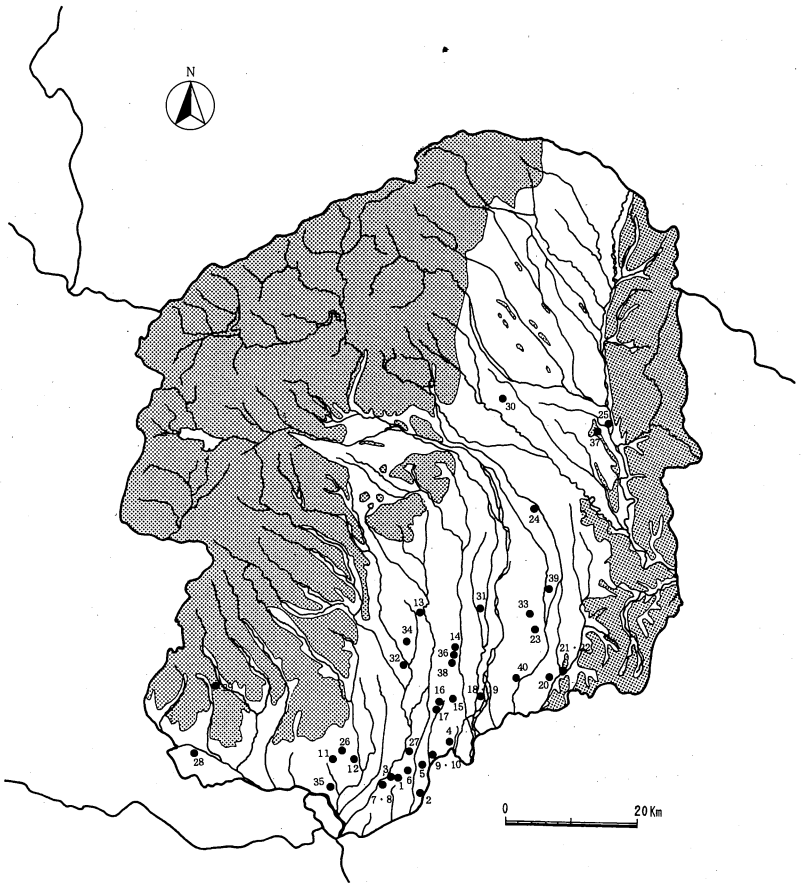
古墳時代前期の土器研究は、弥生～古墳時代への移行期、つまり出現期の古墳や当時の社会を考える上で欠かせない要素であり、現在までに多くの論考が発表されている。これらの土器群は本県の弥生時代後期後半の土器群に直接的な系譜が辿れず、他地域からの影響が顕著であることから、「外来系土器」と呼ばれている。特に東海や南関東といった、比較的その系譜を特定しやすい器種の出現・消長によって編年案が提示され、その出自や波及などの観点から検討がなされてきた。（小森1988、今平1998など）

このように土器様相は、遺跡単位で異なる器種のバリエーションなどがあり、一地域内でも異なった特色が認められる。また、遺跡によってかなり不安定な在り方が指摘されており、このような「多様性」は前代における「地域色」とは異なり、当該期の土器様相の特徴となっている。本稿では、比較的系統の影響が看取し易い日常的に使用される煮沸具である「甕形土

器」（以下、甕）に着目し、形態差を客観的に捉えやすい口縁部・頸部・底部を分析対象とする。これらを個別に形態や時期での画期などで抽出した資料により、波及や定着の過程や集落の展開を明らかにすることを目的とする。今回はその基礎的な研究として、県下の集落遺跡出土の甕を集成及び分類・分析を行い、各段階での傾向を把握することとした。

Ⅱ　対象地域と遺跡

対象となる地域と遺跡について述べておきたい。まず、地域は栃木県全域であるが、当該期に属する遺跡は報告されているものや散布地も含めると80遺跡以上になる。そのうち、分析の



1	五料遺跡	11	赤羽根遺跡	21	東台遺跡	31	砂田東遺跡
2	金山遺跡	12	伯仲遺跡	22	向北原遺跡	32	台畑遺跡
3	牧ノ内遺跡	13	花の木町遺跡	23	井頭遺跡	33	古内Ⅰ・Ⅱ遺跡
4	寺野東遺跡	14	権現山北遺跡	24	砂部遺跡	34	明城遺跡
5	下犬塚遺跡	15	薬師寺南遺跡	25	那須八幡塚古墳墳丘下	35	熊野遺跡
6	秋山遺跡	16	鳥森遺跡	26	旗洲遺跡	36	大日塚古墳墳丘下
7	乙女北浦遺跡	17	県工業団地内遺跡	27	鳥久保遺跡	37	大森遺跡
8	乙女亀田遺跡	18	朝日観音遺跡	28	反通遺跡	38	上ノ原遺跡
9	西山遺跡	19	三王遺跡	29	菅田西根遺跡	39	谷近台遺跡
10	福ノ台遺跡	20	久保遺跡	30	十三塚遺跡	40	伊勢崎Ⅱ遺跡

第１図　遺跡分布図

対象としたものは第１図の40カ所の集落遺跡に限定した。これらの遺跡を選出した基準は⑴土器の総数が口縁部を含む実測図を１個体として10個体以上を超えるもの。⑵実測図や観察表により口縁部の整形や調整が判別できるものである。これらのうち、甕の製作技法・調整などが明らかな報告について選別して扱った。本来すべての地域や遺跡を対象とし、小地域ごとの変遷や地域色を検討すべきであるが、調査事例や資料が小山市周辺から宇都宮市周辺の思川と田川に挟まれた地域に集中するため、この地域を主に扱うこととした。

Ⅲ　甕形土器の分類

栃木県における当該期の土器群には、南関東系、東海系、畿内系、北陸系、赤井戸・吉ヶ谷系などの系統の土器が見られる。ここでは集落遺跡からの出土量が特に多く認められる東海系・南関東系の「甕」について分析の対象とした。この２系統の土器は製作技法から厳密に分けることができないので、明確にそれを示せるＳ字状口縁のものについては区別し、それ以外はまとめて取り扱った。

分類の基準としては、最も個体差が伺える口縁部形態・頸部形態について概観して捉えることとした。分析対象は口縁部から頸部にかけて残存しているものについて１個体として取り扱い、その結果を台付脚部や平底などの底部形態と踏まえることで、その変遷を数量的に把握することを目的とした。

⑴　口縁部形態

甕の分類については口縁部及び頸部の形態により、大きく３タイプに区分した。素口縁・口縁部が刻み目・波状になるもの、Ｓ字状口縁とに分けられる。それらを有文・無文とに区分し、さらに口縁端部の形状で細分した。

①　口縁部形態

Ａ類　有文。口縁部端面を施文する。刷毛状工具・ヘラ状工具や指頭による押捺波状を基準とする。

Ｂ類　無文。

Ｃ類　Ｓ字状口縁。

②　端部の形状（第２図上段）

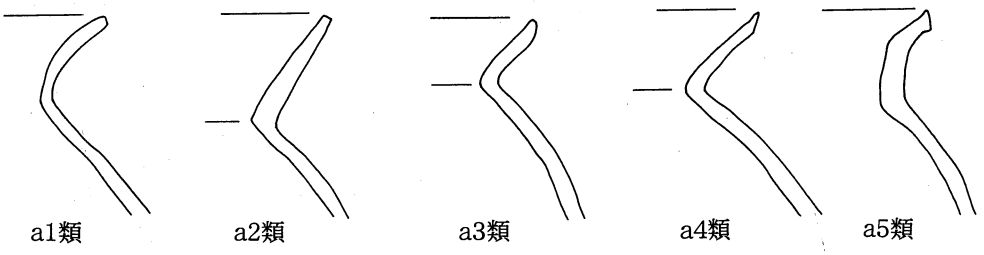
ａ類　口縁部に面を形成もしくは面取り傾向が認められるもの。

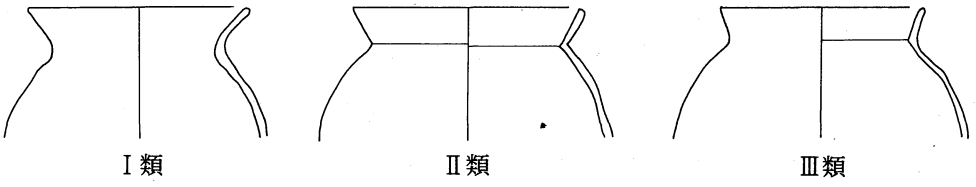
a1　口縁に対して直角の端面を持ち、ヘラ、刷毛工具による面取り整形を伴うもの。

a2　口縁部上端に水平面を持つもの。

a3　端面上角のみが明瞭な稜を持つもの。

a4　口縁部端面上角が鋭角もしくは明瞭な稜を持ち、その上端が小さく立ち上がるもの。





第２図　口縁部・頸部形態模式図

a5　上下に拡張された面取り面を持つもの。

ｂ類　口縁部を丸くまとめて仕上げられているもの。

⑵　頸部形態（第２図下段）

頸部の形態については、その屈曲や稜の有無によって大きく３タイプに区分することができた。

Ⅰ類　　頸部内外面に稜を形成しないもの。「〔」字状

Ⅱ類　　頸部内外面に稜を形成するもの。「く」字状

Ⅲ類　　Ⅰ類よりも頸部の屈曲は強くなり、内面に稜を形成するもの。

Ⅳ　時期設定

栃木県における県南・県央部や県西・県東部では「複数の系統」の土器群が複雑に存在しているために共通した基準が定まりにくい。そのため、新たに出現する器種や外来系土器の消長を主な指標とする編年案が多く提示されてきている。本論でもこの手法を踏まえながら、集落遺跡での出現率が甕に次いで多い、「高坏形土器」（以下、高坏）の坏部や脚部の形態変化を参考として一遺構一時期という設定を行った。高坏は大観すると、濃尾平野を出自とする元屋敷系の出現から畿内系柱状脚への流れが指摘されている。本県においても同様の変遷が認められていることも踏まえて検討すると、概ね４つの段階に分けられる。高坏及び甕の概要と具体的な編年の指標（第３・４図）は次に示すようになる。

Ⅰ期

この段階は台付甕・元屋敷系高坏・小型高坏・小型器台の波及が認められる。高坏は大型・

小型のものが見られる。大型高坏は坏部の形態により２種類に分けることができる。A類は坏下部に稜を有し、内湾気味あるいは直線的に口縁部に至る。脚部については裾部が内湾するもの・脚部中位に透孔を有するものもみられる。B類は坏部が半球形をなすものである。全体的には坏部がやや浅めであり、口縁部に面取りをするものもみられる。

甕については口縁部の形態別に見ると、刻み口縁甕と素口縁甕の出土例が確認できる。刻み口縁甕には台付・平底の両方のタイプが出現している。頸部は前代の様相を引き継いでいるためか、屈曲が緩やかな（頸部形態Ⅰ類）タイプと「く」字に屈曲するタイプ（頸部形態Ⅱ類）が認められる。屈曲が緩やかなタイプには、口縁に対して直角な端面をもち、口縁端部に刷毛状工具とヘラ状工具などによる押圧などを施した個体が見られる。「く」字に屈曲するタイプは口縁端部を丸く仕上げており、その外面に施文している。

素口縁甕についても台付・平底が見られるが台付のものは僅かであり、ほぼ平底のもので占められている。頸部については屈曲が緩やかなタイプが半数以上確認でき、「く」字に屈曲するタイプも稀少であるがこの段階から認められる。

この段階に伴う甕類は、そのほとんどが小山市域を中心とする遺跡からの出土であり、その数量も少ない。刻み口縁のタイプは緩やかな頸部をもつ台付のものが比較的多く認められる。素口縁のタイプも緩やかな頸部をもつ平底の甕が主流である。

当期に該当する遺跡としては、牧ノ内遺跡18号・21号・42号住居跡、寺野東遺跡SI-26、五料遺跡SI-26、烏森遺跡B2-SI002・SI003・SI007などがある。

Ⅱ期

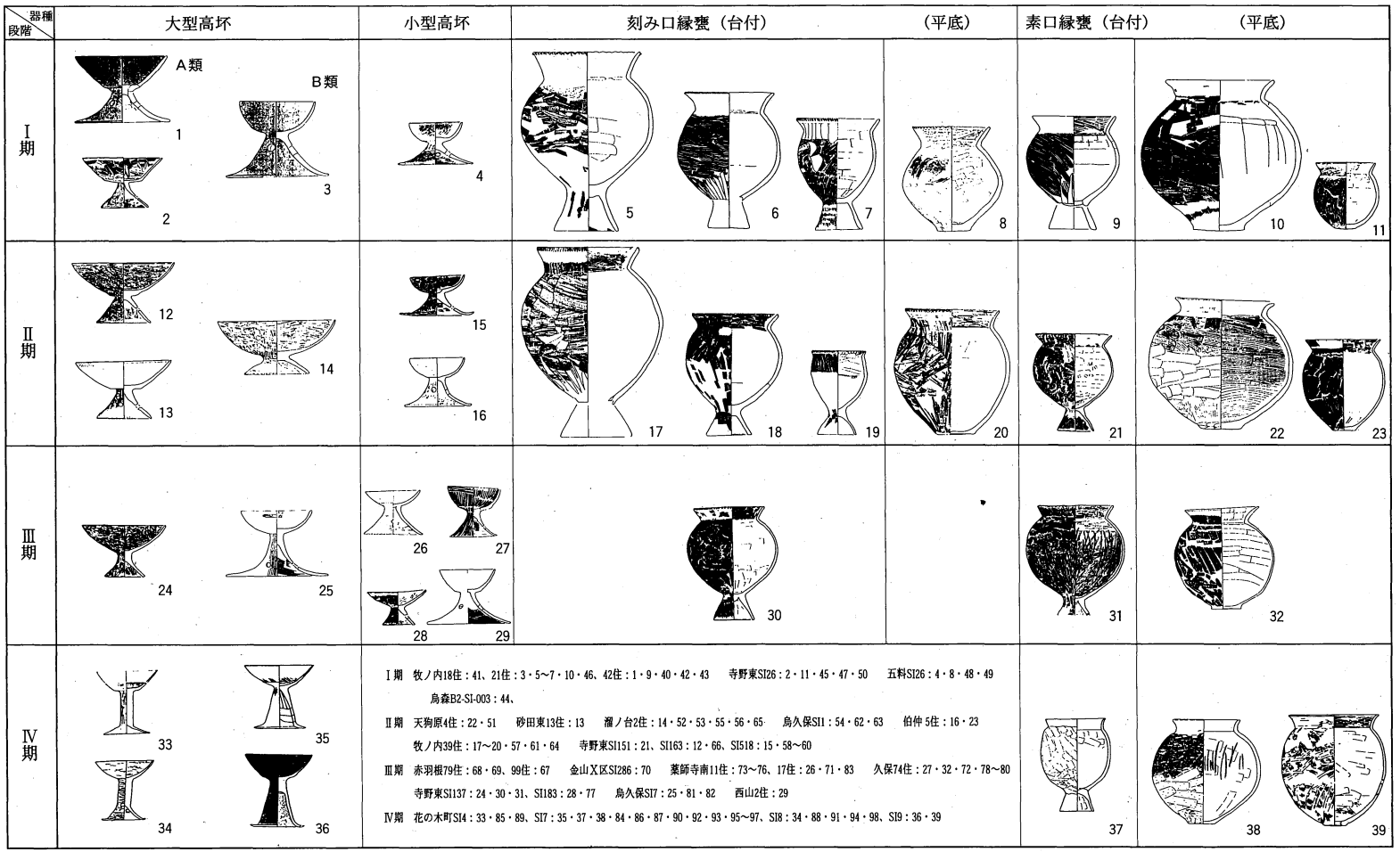
器種構成は前段階と同様であるが、S字状口縁甕のB類（赤塚1986）の波及が認められる。また、高坏や甕の形態変化についても前段階の影響を受けているが、細部の変化は見られる。

高坏はほぼ前段階の形態を踏襲するものと考えられるが、坏部がやや広く浅くなるものがあり、脚部は屈曲せず、僅かに内湾するか直線的に開くものがみられる。透孔も脚部中位に施されるものが多くみられる。口縁部に対しての面取りはほとんどみられなくなる。

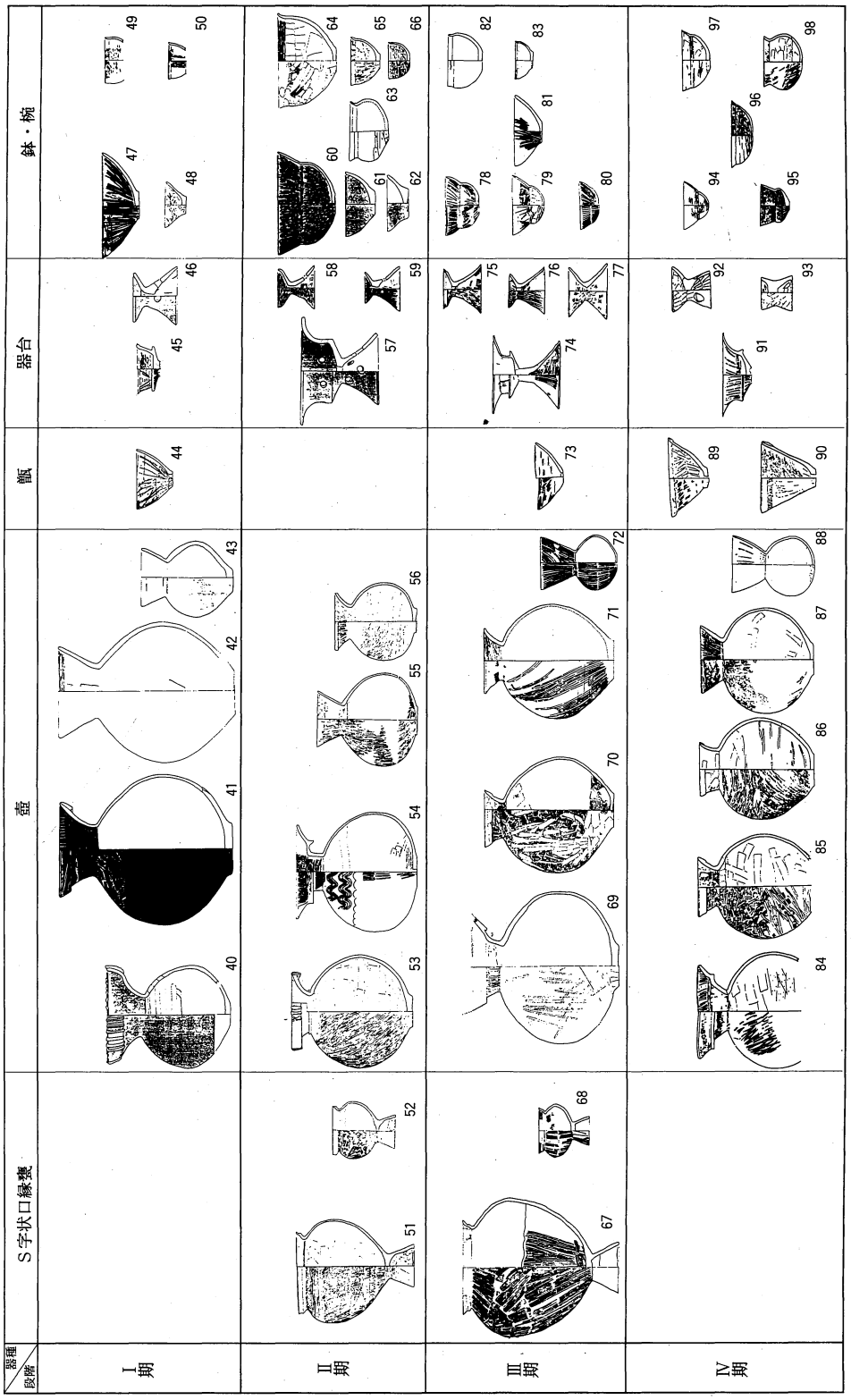
小型高坏の坏部は半球状をなし、口径より裾部径が大きい。裾部は大きく外反気味に開いており、脚部中位には透孔が穿たれている。

甕は頸部の屈曲がⅠ期段階よりも強くなり、形状が「(」状から内外面に稜をもつ「く」字状へ変化していく段階である。口縁端部の面取りをするものは前段階よりも稀少であり、丸く仕上げる形状のものが多くみられるようになる。タイプ別に見ると、刻み口縁甕は端面を持つが「く」字に屈曲する台付甕に僅かにみられる。素口縁の甕は端部を丸くするものが主流となる。底部は平底と台付の割合がほぼ同じぐらいになる。

当期に該当する遺跡としては、天狗原遺跡４号住居跡、砂田東遺跡13号住居跡、溜ノ台遺跡


器種
段階
大型高坏
小型高坏
刻み口縁甕（台付）
（平底）
素口縁甕（台付）
（平底）
Ⅰ期
Ⅱ期
Ⅲ期
Ⅳ期
A類
B類
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
Ⅰ期　牧ノ内18住：41、21住：3・5～7・10・46、42住：1・9・40・42・43　寺野東SI26：2・11・45・47・50　五料SI26：4・8・48・49
烏森B2-SI-003：44、
Ⅱ期　天狗原4住：22・51　砂田東13住：13　溜ノ台2住：14・52・53・55・56・65　烏久保SI1：54・62・63　伯仲5住：16・23
牧ノ内39住：17～20・57・61・64　寺野東SI151：21、SI163：12・66、SI518：15・58～60
Ⅲ期　赤羽根79住：68・69、99住：67　金山X区SI286：70　薬師寺南11住：73～76、17住：26・71・83　久保74住：27・32・72・78～80
寺野東SI137：24・30・31、SI183：28・77　烏久保SI7：25・81・82　西山2住：29
Ⅳ期　花の木町SI4：33・85・89、SI7：35・37・38・84・86・87・90・92・93・95～97、SI8：34・88・91・94・98、SI9：36・39

第３図　編年案(1)



第４図　編年案(2)

２号住居跡、烏久保遺跡SI-1、伯仲遺跡５号住居跡、牧ノ内遺跡39号住居跡、寺野東遺跡SI-151・SI-163・SI-518などがある。

Ⅲ期

この段階は定型化した小型丸底坩・小型丸底鉢の波及する段階である。高坏は、坏部下端の稜が不明瞭なＡ類と、稜を持たない半球状のＢ類がみられるが、双方とも口径が大きくなり、さらに浅くなる傾向がみられる。この段階では脚部が直線的に開くもの・大きく外反するもの・裾部が大きく開くものなどのバリエーションがあり、谷近台遺跡には脚部が一部柱状化しているものもみられる。無稜高坏には低脚の高坏が出現し、脚部径が坏部径の１／２に近くなる。

小型高坏は坏部が半球状で内湾もしくは直線的に立ち上がり、脚部は「ハ」状にひろがる。前段階に比べ器高と口径がほぼ同等もしくは器高がやや高くなる傾向がみられる。

甕はこの段階でも台付甕は存続しており、刻み口縁と素口縁のものがある。刻み口縁の台付甕は口縁端部に面取りの傾向を残す「く」字屈曲タイプであるが、すでに稀少であり出土地域も小山市域に限られている。素口縁でも「く」字屈曲タイプの数量は前段階と比較すると少なくなり、出土している地域も小山市～宇都宮市エリアの他に県東部の芳賀郡域と県南部の熊野遺跡にみられるのみである。平底甕については素口縁のみの確認であり、「く」字屈曲タイプで端部を丸くまとめるものが展開する。この段階までに刻み口縁の平底タイプは消滅していると考えられる。

当期に該当する遺跡としては、薬師寺南遺跡11号・17号住居跡、赤羽根遺跡79号・99号住居跡、烏久保遺跡SI-7、寺野東遺跡SI-137・SI-183、久保遺跡74号住居跡、西山遺跡２号住居跡、谷近台遺跡２号住居跡、柴工業団地内遺跡11号住居跡、金山遺跡Ｘ区SI286などがある。

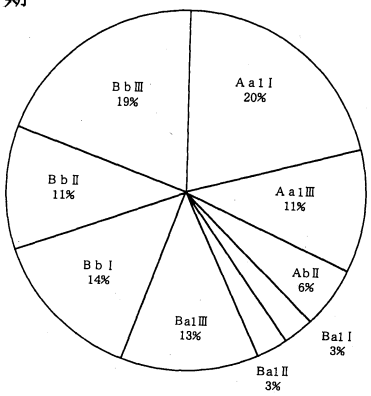
Ⅳ期

この段階の資料は極めて地点的に存在するために偏りがあるが、概ね小型高坏・元屋敷系高坏の消滅・柱状開脚高坏の波及が認められる。高坏は前段階までみられたＡ類・Ｂ類が消滅しており、かわりに脚部が中実柱状と中空柱状のものが出現してくる。中空のものは裾部がラッパ状に開くものがあり、脚内部の輪積み痕も顕著でなくなる。坏部についても有稜・半球形と区別することができる。この段階は「花の木町段階」（後藤1992）に位置付けられる。

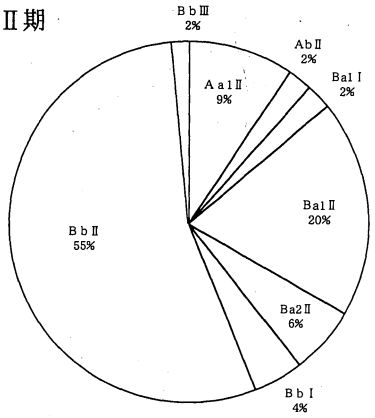
甕は刻み口縁台付甕とＳ字状口縁台付甕は消滅する。素口縁甕について、台付甕は花の木町遺跡に存在し、口縁端部も面取り傾向を残す。器面調整は刷毛目ではなくヘラケズリがみられるようになる。平底甕の総ては口縁端部を丸くまとめ、胴部下半にヘラケズリ調整が見られる。

当期に該当する遺跡としては、花の木町遺跡SI-4・SI-7・SI-8・SI-9、大森遺跡１号住居跡、砂部遺跡SI-439、西山遺跡９号住居跡、赤羽根遺跡23号住居跡などがある。

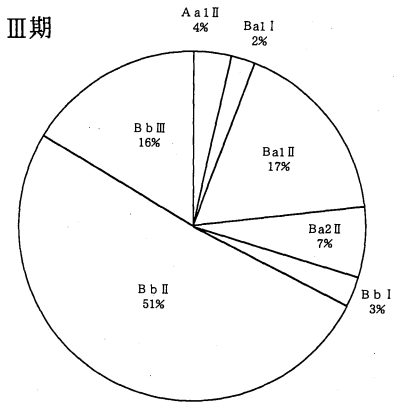
Ⅰ期



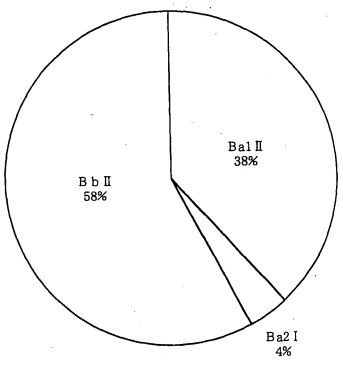
Ⅱ期



Ⅲ期

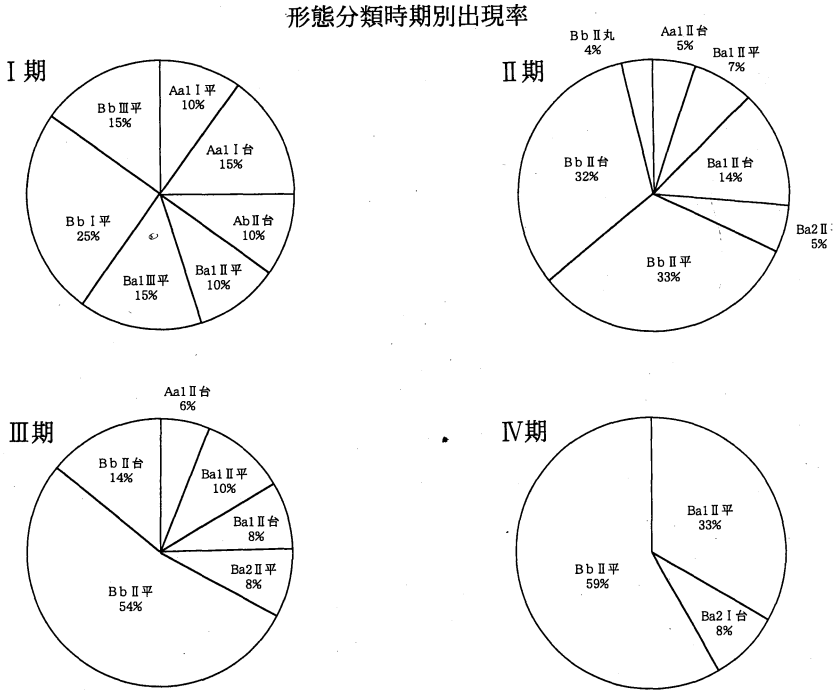


Ⅳ期

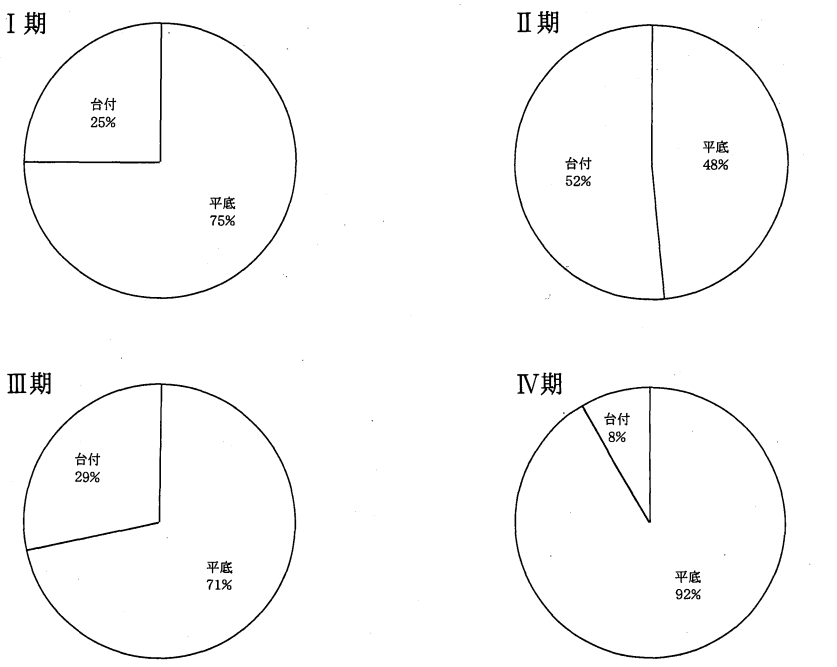


第１表　口縁部・頸部出現率円グラフ

形態分類時期別出現率



底部形態時期別出現率



第２表　形態分類時期別出現率円グラフ

Ⅴ　甕形土器形態変化の傾向

ここでは前項を踏まえ、段階設定及び分類可能な個体を抽出し、甕の出土傾向を概観する。ここで取り扱う遺跡は、小山市～宇都宮市一帯の地域といった調査事例が最も多い地域に集中している。したがって、対象とした資料は地域及び各段階で遺跡数や個体数などの偏りがあることも事実である。しかし、時期的な同時性や各要素の組み合わせを前提とし、型式の変遷を考えてみたい。対象とする資料は、Ⅰ期段階で６遺跡（30軒）74個体、Ⅱ期段階で12遺跡（57軒）233個体、Ⅲ期段階で10遺跡（49軒）158個体、Ⅳ期段階で２遺跡（４軒）26個体の都合491個体である。

Ａ・Ｂ・Ｃ各類の出現率について、まず県内全体の傾向をみるとⅠ期段階ではＡ類が37％、Ｂ類が63％を占め、ほぼ６：４の割合で認められる。Ⅱ段階では、Ａ類10％、Ｂ類70％、Ｃ類20％、Ⅲ段階ではＡ類が３％、Ｂ類が86％、Ｃ類11％となり、Ⅳ期ではＢ類のみとなる。このように、口縁部形態のうち、Ａ類は前半期を特徴づける形態であり、また前期を通して存在するのは素口縁のＢ類である。このＡ・Ｂ類の段階的な特徴をまとめてみる。（第１表）

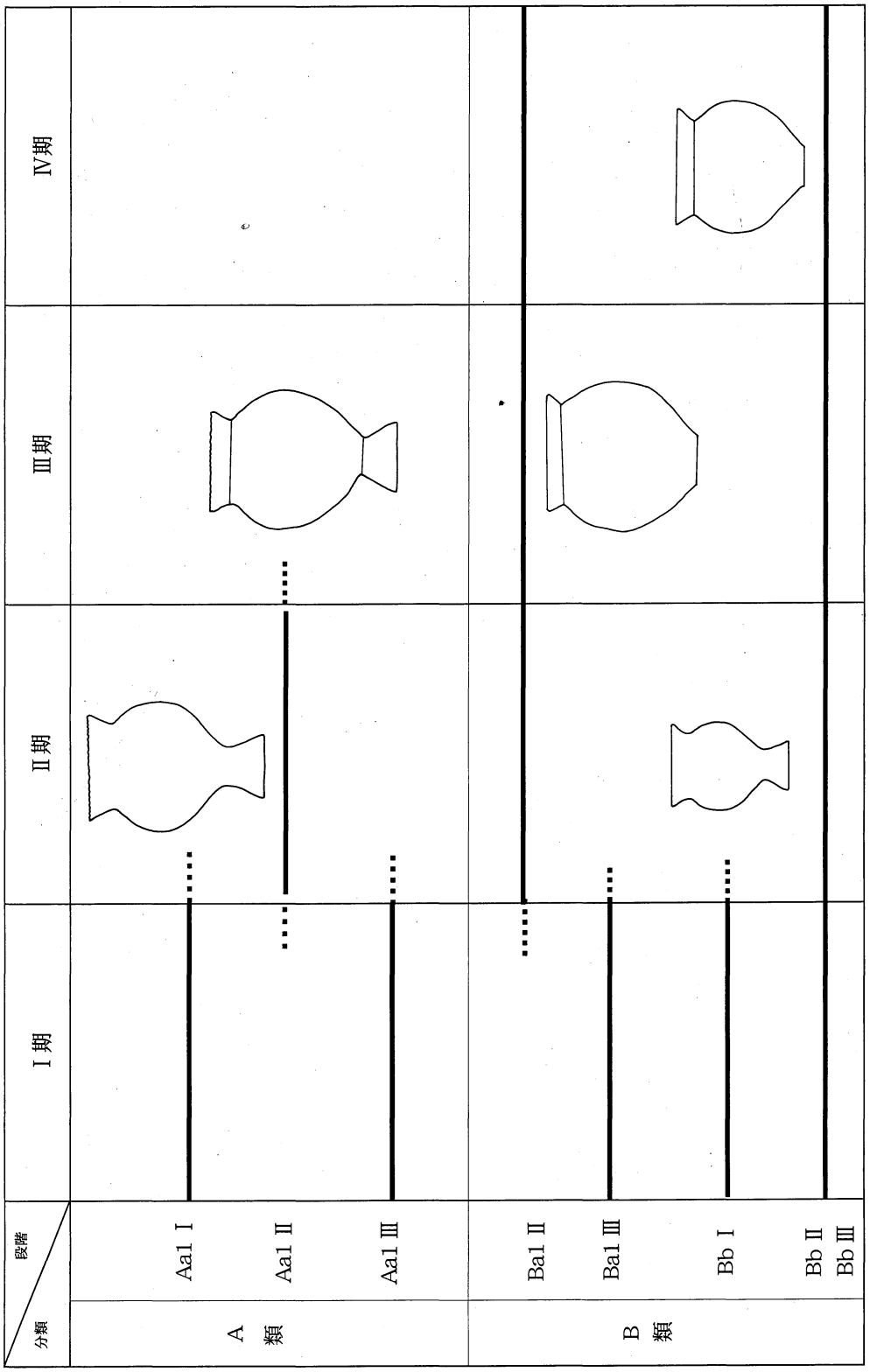
前半期を特徴づけるＡ類は、Ⅰ期段階で口縁部に面取り整形を持つものが多く認められ、頸部に明確な稜をもたないもの（Ⅰ類）と頸部内面に稜を持つもの（Ⅲ類）が多く存在する。刻みはヘラ状の工具を用いるものが多いが、指頭押圧による波状のものが少数確認されている。Ⅱ期段階になると、Ａ類の頸部形態は内外面に稜を持つⅡ類が主体となり、Ⅲ期にはほぼ消滅する。

Ｂ類の頸部形態については、Ａ類とほぼ同じ傾向であるが、口縁部を丸くまめたものが多くみられる。また、Ⅰ期段階からＡ・Ｂ類両者にみられたいわゆる「く」字状口縁甕は、Ⅱ期以降半数以上を占め、この種の中で主体的な存在になる。

次に底部形態について、上記の資料のうち完形品172個体（Ⅰ期25個体、Ⅱ期71個体、Ⅲ期64個体、Ⅳ期12個体）を対象に、平底甕と台付甕の出土傾向を簡単に触れてみる。（第２表）

まずＡ類については、Ⅰ期段階で平底と台付の割合がほぼ３：７で認められるが、Ⅱ期段階以降になると台付甕が主体になる。一方、Ｂ類はⅠ期段階でほぼ平底が占め、Ⅱ期段階では台付甕が増加する傾向があり、両者の割合がほぼ等しいものとなる。Ⅲ期段階になると、前段階と比較して平底が約80％と逆転する傾向があり、Ⅳ期段階では更に増加して９割近くを示す数値となる。

以上、各要素の結果を整理すると、口縁部・頸部形態については、大きく口縁部の無文化、頸部の「く」字化といった変遷が辿れる。また、底部形態に関して、Ａ類はⅠ期段階で僅かに平底甕がみられるが客体的な存在であり、台付甕が各段階を通して主体的に出土している。これに対し、Ｂ類は平底甕が各段階を通して主体をなすものであるが、Ⅱ期段階でＡ類と同様に



第5図　甕形土器消長模式図

台付甕が一時的に増加する傾向が看取される。

Ⅵ　まとめ

甕のタイプ別の変遷及び傾向をみてきた。本稿は、継続して検討していく上で筆者なりの基礎データとして提示したものであり、問題点など多々ある。最後に今回得られた結果をまとめた上で、かつ今後の問題点についても簡単に触れておく。

口縁部・頸部形態及び段階ごとの変遷については、第５図の消長模式図に簡単にまとめてみた。Ａ類は、Ⅰ期段階で頸部が比較的緩やかで、口縁端部は口縁に対して直角な面を形成するaⅠ類とaⅢ類が存在する。これらのタイプはⅠ期以降には継続せず、これに変わってⅡ期にはaⅡ類が出現する。これはいわゆる「く」字口縁であるが、口縁端部に同様な面取りを持つ台付の甕になり、出土数は少ないもののⅢ期まで継続するようである。このようにＡ類はⅠ期段階に小山市周辺域に波及するがⅡ期以降広域に展開することなく、この地域のみで終息するようである。

刻みについては、棒状工具や篦状の工具を用いたものが多く複数のバリエーションがある。特にⅠ期段階で少数確認されている大きな波状をなすものが特徴的であり、また主に平底甕に施されているものが多い点なども併せ、これらの波及の問題についても考える必要がある。

Ｂ類は口縁端部形態により大きく直角な水平面を形成するa1・a2類と端部を丸くまとめるｂ類の２つのタイプがみられた。Ⅰ期には平底のタイプのみで、BbⅠ・Ⅲ類や「く」字口縁タイプのBaⅡ類がみられる。大きな変化としては、Ⅱ期段階になると前段階には見られなかった台付タイプが大幅に増加し全体の５割を占め、台付・平底のタイプすべてが「く」字屈曲のⅡ類となることである。この段階はa1・a2類・ｂ類ともに台付・平底が見られるが、ｂ類の比率がそれぞれ高くなっている。Ⅱ期で台付が増加すると共に、ｂ類がａ類にかわり、その主体を担うようになる。続くⅢ期には再び平底のタイプが主流を占めるようになる。平底のタイプの大半は端部を丸くまとめるものになるが、僅かながら若干面取り傾向のあるものも存続している。Ⅳ期でも台付タイプは僅かに存続しているが、その大半は平底になる。面取り傾向の個体もいくつか見られるが、主体は端部を丸くするもので煮沸具の中心となり、中期的な平底甕へと繋がる。

今回のデータから読みとれることは、Ⅱ期段階に大きな画期が求められることである。この段階は、全体の傾向として口縁端部の変化や頸部の「く」字化、またＢ類の一時的な台付甕の増加現象、Ｓ字状口縁甕の波及など、器種の構成や形態変化が顕著にみられる。今後、この結果を踏まえて甕の製作技法や地域圏の問題、更に他の器種の形態変化を検討し、甕の波及や定着の過程を明らかにしていきたい。

参考文献

秋元陽光・今平利幸　1998「宇都宮市東谷笹塚古墳出土の遺物」『峰考古』第13号宇都宮大学考古学研究会
秋山隆雄　1988『西山遺跡』小山市教育委員会
秋山隆雄　1997『牧ノ内Ⅰ－方形周溝墓・住居跡編』小山市教育委員会
池田敏宏　1995『猿渕遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
池田敏宏　1999『台畑遺跡・谷向遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
岩淵一夫ほか　1984『赤羽根』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
大川　清ほか　1986『大森遺跡・谷田１号墳』日本窯業史研究所
大川　清ほか　1992『上ノ原・向原南遺跡』上三川町教育委員会
大金宣亮ほか　1974『井頭遺跡』栃木県教育委員会
大村　直　1994「戸張一番割遺跡の甕形」『史館』第25号　史館同人
片根義幸　1998『間々田遺跡群Ⅱ』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
かみつけの里博物館　1998『人が動く・土器も動く　古墳が成立する頃の土器交流』第２回特別展
神野安伸　1994『天狗原遺跡』宇都宮市教育委員会
北村尚子　1997「古墳時代初頭の土器文化圏の変容とその背景－相模・南武蔵における甕形土器の分析から－」『民族考古』第４号　『民族考古』編集委員会
久保哲三ほか　1979『権現山北遺跡』宇都宮市教育委員会
久保哲三ほか　1990『茂原古墳群』宇都宮市教育委員会
後藤信祐　1987『花の木町遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
後藤信祐　1990『溜ノ台遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
古墳時代調査班　1991「茨城県における古墳時代前期の遺跡について」『研究ノート』創刊号　㈶茨城県教育財団
古墳時代土器研究会　1997『土器が語る－関東古墳時代の黎明』第一法規出版株式会社
小森紀男　1980「栃木県における五領式土器の研究」『宇大史学』2
小森紀男　1988「古墳出現期における外来系土器の検討－栃木県内出土例を中心として－」『栃木県考古学会誌』　第10集　栃木県考古学会
今平利幸　1991「栃木県における古墳時代前期の竪穴」『栃木県考古学会誌』第13集　栃木県考古学会
今平利幸　2000「下野における古墳時代前期外来系土器の波及と定着」『栃木県考古学会誌』第21集
斉藤光利　1987『朝日観音遺跡』　南河内町教育委員会
下谷　淳　1998『三王遺跡』　南河内町教育委員会
真保昌弘　1999『那須吉田新宿古墳群　発掘調査概要報告書』　小川町教育委員会
山武考古学研究所　1996『熊野遺跡』
田代　隆ほか　1986『烏森遺跡』住宅・都市整備公団・㈶栃木県文化振興事業団
田代　隆　1992『久保遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
津野　仁　1997『金山遺跡Ⅴ』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
栃木県立なす風土記の丘資料館　1997『前方後方墳の世界Ⅱ』－那須に古墳が造られたころ－
中山　晋ほか　1981『柴工業団地内遺跡調査報告』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
中山　晋　1996『砂田東遺跡・上横田A遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
野口静男ほか　1982『乙女不動原北浦遺跡』小山市教育委員会
橋本澄朗　1986『向北原－古墳時代前期集落跡発掘調査の記録』－益子町教育委員会
橋本澄朗ほか　1978『薬師寺南遺跡』栃木県教育委員会
日賀野宏志・中村享史　1991『十三塚遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
福田定信ほか　1992『下犬塚遺跡発掘調査報告書』小山市教育委員会
藤田典夫ほか　1984『伯仲遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
藤田典夫　1990『砂部遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
古内Ⅰ・Ⅱ遺跡緊急調査会　1994『古内Ⅰ・Ⅱ遺跡確認調査報告書』真岡市教育委員会
前澤輝政・山崎博章ほか　1987『菅田西根遺跡』　足利市遺跡調査団
前澤輝政・橋本　勇ほか　1987『反過遺跡発掘調査報告書』　足利市遺跡調査団ほか
三沢正善　1991『烏久保遺跡発掘調査報告書』小山市教育委員会
吉田　哲　1999『伊勢崎Ⅱ遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団